



---

# 熱量 1 枚の絵画が放つ LOVE STORY

---

## 第 4 章 琥珀



## 琥珀との出逢い

一ツ橋の出版社からどれくらい歩いたのか、千鳥ヶ淵の遊歩道にいた。  
桜の時期は花見客で溢れているこの歩道は、紅葉を控え樹木が生い茂り、人はまばらながらそれなりに趣がある。

ミイミイとなんだらうか、聴こえる。  
落ち葉に何かが埋もれている。そっと葉をよけると生まれて間もない仔猫が……。  
親猫に育てられているとは思えないほど衰弱している。

凜子は仔猫をタオルにくるみタクシーを拾った。  
「四谷、荒木町まで。」  
凜子の住まいは100年続く料亭の敷地内にある。  
叔母が女将を務め、代々豪商の屋敷を曾祖父が買い取り料亭を営んでいる。  
長崎総合病院の院長を務める凜子の長兄、蒼が医学部在学中に居住していた。  
「あその動物病院の前で降ろしてください。」  
料亭の庭に住み着いている猫を連れてくるかかりつけの病院だ。

「凜子さん、どうしましたか？」  
「千鳥ヶ淵で拾ったの。助けて欲しい。」

「生後1週間くらいかなあ、よく生きていたね。保証はできないけど1週間程度預かります。連絡します。」  
「よろしくお願いします。」

料亭の裏口から厨房を通って庭園の脇を歩き、従業員宿舎を抜けた先に、メゾネットタイプ4部屋のみの低層住宅1部屋が凜子の住まいだ。  
凜子の他は外資系バンク、スーパーブランドの日本支社、大手弁護士事務所がここ10年社宅として法人契約している。  
祖父や父の伝手なのだろう。セレブでエグゼクティブなのは確かだ。非対面の設計はイギリスの建築家によるもので築50年だ。  
中庭には猫がゆったりと暮らしている。一応飼い主は凜子だ。  
1週間後、院長から連絡が入る。  
「お腹の調子も整い、目も開いて順調に回復しました。凄い生命力です。」  
「すぐに伺います。」

凜子は仔猫と出逢った日から、庭の手入れと料亭の帳場の手伝いの毎日。  
デスクに向かう気もなかった。

友人の奏子から電話だ。

「聞いたよ。日本の契約は著者には不利。甲乙ってなによねえ、そのうえ曖昧だし、グレー過ぎる。いまだに是正されないし、ほんときつかったね。双方が納得するまで詰めて、法律上きちんと契約し書面に残すことがまだ当たり前じゃないから、企業有利なんだよね……。もう見切りつけて上海においでよ。言葉も困らないし住まいと仕事は任せて。」

彼女は上海を中心にアジアでファッション媒体のディレクターとして活躍している。

「ありがと。でもいまは何もしたくない。しばらく休業する。」

「いまさらお金に困らないんだから、それがいいよ。」

奏子もいるし上海もいいかな。

ゲージから出てきた小さな猫は、白い毛がぼそぼそと生え始め栄養状態もいいようだ。

なんといっても瞳が黄金色で大きい。

「長毛ですね。瞳が美しい男子です。」

仔猫は凜子の顔を見ながら必死で泣き叫ぶ。どうかおいてかないでと訴えるようだ。

「離乳食にも慣れていきます。1週間したらまた来てください。」

名が決まってないからか、渡された診察券に名がない。

「名前は琥珀にします。」

「琥珀くんですね。瞳の色にちなんで……。」

## 俺のフリッガ

「蒼さん、帰国しました。今度は父の事務所です。住まいは「花長」の別棟で。」

「懐かしいな、俺はいま長崎に戻っている。「花長」には凜子が住んでいるぞ。いい飲み友ができたな。」  
秋月は凜子の長兄の後輩。「花長」の女将である叔母の旦那さんの甥、遠い親戚にあたる。

凜子さんに会うために帰国した。彼女に並べる男になりたくて国際弁護士になった。  
そして10年経て帰国、父親のローファームに入る。住まいは迷わず「花長」の別棟だ。

秋月の名は香港にルーツがある母親が名付けた。最も美しい春に咲く花、そして秋の夜を照らす月「春花秋月」  
からとった。秋月の姉の名はもちろん春花だ。  
名前の通り姉弟は見目麗しく10代の頃は芸能関係者が日参したらしい。  
春花は「花長」と同じく荒木町で小料理屋「春花秋月」を営む。

「春花、俺が帰国したことを凜子さんには言わないでね。」

「うちに住めばいいのにわざわざ花長に？」

「凜子さんがいるから、機会を逃したくない。再会も自然に任せたい。」

「凜子ちゃん一筋ね。どれだけモテても彼女しか目に入らない。でも凜子ちゃんは秋月の気持ちを知らないで  
しょ。」

「憧れから恋愛へ飛躍するんだ。」

小学生の頃から毎年休暇は長崎で過ごした。もちろん凜子さんの家だ。

憧れのお姉さんだった。

彼女の弾くピアノに合わせて演奏する仲間が集う。凜子さんはいつも輪の中心で俺は離れてみているしかなか  
った。

死に物狂いでサックスを習い、凜子さんのピアノに合わせて「ラブソディ・イン・ブルー」を合奏した。

互いに視線を絡ませながら演奏するなんて最高に幸せだった。

ホッケーの試合には、必ず応援に来てくれた。もちろん羨望の眼差しを向けられる。凜子さんは本当にかっこ  
いい女性だから・・・。

決まった恋人をつくらなかった凜子さんに彼氏ができた。

地元では憧れのカップルで、蒼さんの親友だった彼は、東京の大学に進学して法律家を目指していた。

しばらく遠距離恋愛が続き、やがて凜子さんは東京の大学に入学し、俺はアメリカに留学した。凜子さんは外  
資系の広告代理店へ、彼は検察官に、蒼さんは医者道へ進んだ。

そして俺は10年を経て、法律家として日本へ帰国する。

麹町にある法律事務所は創業70年、父で2代目。各専門家を有し、アシスタントも含め総勢60名ほどの中

堅だ。

版權、著作権、商法もグローバルに変貌し、国際弁護士の需要も増え続ける。

せつかくアメリカの大手法律事務所で実績を積み上げているのに、いま帰国なんてもったいないとアドバイスされたが、迷いはない。俺は凜子さんがすべてだから。

しなやかでいて強靱な美しさで圧倒する凜子さんは、20年前から俺の女神。北欧神話の愛の女神フリッグなんだ。

帰国して1か月。無事にホテルから「花長」別棟に引っ越し、凜子さんの隣人に。

彼女は料亭の専用通路から出入りするらしく、俺が帰宅する頃にはすでに明かりがついている。出勤する気配もないのでまるで顔を合わす機会がない。

「春花、凜子さんの近況は？引っ越したけどまるで会えないんだ。」

「フリーランスで外資企業と契約しながら、覆面WEB小説家としても人気よ。自宅で執筆していることも多いよ。うちでご飯食べるか、花長の賄いかお弁当を従業員と食べるか。」

「え？春花の店に来るの？」

「仲間と一緒にだったり、一人のときも週に3日は顔を出すよ。」

やっぱり運命の相手だな、凜子さんは……。

数日後……

「秋月？春花だけ凜ちゃんを迎えに来てくれる？」

「え????いきなりどうして……」

「自宅だったらすぐでしょ。いいから、早く。いまこっちは手が離せなくて、お願い。」

「うん。」

帰国してからまだ一度も会えていないのに、いきなりお迎えって???

店の扉を開ける。

「凜ちゃんは奥の座敷よ。帰るときは裏口からね。」

カウンターにはまだ3組の客がいる。

奥へ進むと座布団を並べて横たわる凜子さんの寝姿が……。

「凜子さん、帰りましょう。」

「うん？誰？眠い……。」

「秋月です。久しぶりに帰国しました。」

「秋月????秋ちゃんってアメリカでしょ、誰よ。」

「ともかく帰りましょう。」

凜子さんを抱えて店の裏口から出る。背負って自宅に向かう。

「飲み過ぎですよ。どうしたんですか？」

「……………この上なく悔しい思いをした。契約書なんて知らないし言いくるめられた。このまま引き下がれない。もうだれも信用できない。」

「僕が相談に乗りますから。部屋に入りましょう。番号は？」

「誕生日……………」

昔からなんでも暗証番号は誕生日だからな。わかりやすい。

部屋のつくりはほぼ秋月の部屋と同じだ。

とりあえずソファに寝かせる。

「水が飲みたい。ところで誰？なんでここに？まあいっか。ZZZZ」

水を飲ませてブランケットをかける。

(ゆっくり休んでください。二日酔いの薬です。秋)

とメモを残し部屋をあとにする。

いきなりフリッガの肩を抱いた。ぐっすり眠る凜子さんを背負うなんて…………

きつと忘れていただろうな。

こちらから自宅まで送ったのは俺です、なんて連絡できないし…………

偶然の再会ってこれかよー先が暗いな。

会えただけでもうれしかった。やっぱり俺のフリッガ…熱量が思い切り伝わった。

誰かが顔をなめている…………琥珀か？

ここはどこ？自分の家？どうやって帰ったの？

散乱した洋服や投げ出されているカバンが目に入る。

テーブルのペットボトルを一気に飲み干す。メモだ。

秋って？？？まさか秋月？？？そういえば昨夜は春花さんの店で飲んでたっけ。

ここ日本だよな…………わけわからん。

携帯を探す。

「春花さん？凜子。いつの間にか自宅のソファで寝てた。メモに秋ってあるけどわけがわからない。」

「昨夜、よほど嫌なことがあったのね。悪い酒だから酔いも早くて、起こしてもびくともしなかったのよ。だから秋月に迎えに来てもらったの。」

「アメリカでしょ……………」

「1カ月前に帰国して先日花長の別棟に引っ越してきたのよ。凜ちゃんにはまだ会えないって言ってたけど。」

「連絡ないよ…………他人行儀だよな。連絡先教えてください。」

春花に秋月の電話番号を聞く。

いま午前10時。

かけると呼び出し音が…………不在なのでメッセージを残す。

「凜子です。昨夜はお世話様でした。番号は春花さんに聞いた。改めて御礼をしたいので連絡ください。これはわたしの番号です。」

クライアントとの打合せを終えて部屋へ戻ると、画面に着信ランプが。

凜子さんからのメッセージだった。

即着信番号をプッシュ

「秋月です。打ち合わせ中で出られずすみません。体調はいかがですか？」

「っていうよりなんで帰国したのに連絡しないの???それも「花長」の住民なんてまるで知らなかったわよ。ちょっとひどくない?無視するなんて・・・。」

「無視なんてとんでもない。落ち着いてから報告するつもりでした。父の事務所で働くことになって帰国しました。」

「明日の予定は?定時で帰宅する?」

「はい。19時には。」

「じゃあ、19時半にうちにきて。夕飯を一緒に食べよう。シャンパンとデザートは持ち込みでよろしく。」

「はい。では明日。」

携帯を持つ手が震える。

凜子さんはいきなり俺の前に現れた。俺は突然の出来事への驚きと感激で熱量アップ。

そして明日、待ちにまった俺のフリッグと再会。

「明日の17時以降は予定を入れなくてください。すでに入っていますから。」

そうアシスタントに告げる。

「大人の女性が好むスイーツを教えてください。」

「そうですね。ジャンポールエバンのマカロンをいただけたら嬉しいですね。ビジュアルもテイストも最高です。それと千疋屋の生フルーツゼリーかな。銀座松屋限定レモンですね。」

「ありがとう。」

同じくして凜子は麹町のイタリアン「エリオ・ロカンダ」にデリバリーをオーダー。

ここのイタリアンは凜子のナンバー1だ。

「支配人、凜子です。明日の19時半からのデリバリーをお願いします。

ブルスケッタ、牛肉のカルパッチョに季節の前菜盛り合わせ。パスタはバジリコソースのジェノバ風にリゾはシェフお薦めで。あと仔牛の薄切り白ワイン風味と手長エビのオープン焼きかな。二人だからボリュームはお任せします。ブラックの種入りオリーブもね。」

「かしこまりました。お届けは18時、盛り付け、セッティングまでお任せください。」

「よろしくお願いします。」

ここは、出張シェフが仕上げと盛り付けをしてくれるので、本物の味がリアルに楽しめる。

イベントやパーティなど仕事で依頼することも多く、自宅の食事会にたびたびお世話になっている。

せっかく帰国して一緒に食事するなら、最高のイタリアンはベストチョイス。

二日酔いから覚めて、家じゅう大掃除。ソファでは琥珀が爆睡している。

秋月は仕事を終えて、銀座で目的のマカロンとゼリーを買いワインショップエノテカへ。  
メニューがわからないので、春花に聞いた銘柄「サッシカイヤ」の赤と白。ソムリエお薦めのシャンパンとアマロを購入し、タクシーで自宅に。  
凜子の好きなカサブランカの花束は配送済みだ。

シャワーを浴びて ON から OFF へ。  
仕事着であるゼニアのスーツから、ブルネロクチネリのブラウスとパンツに着替える。  
時計は IWC からパネライに。香りはウッディムスクとプライベートモードに切り替える。  
自宅なのでテーマはリラックス&エレガントで。  
185 センチの身長ではすべて海外ブランドになるが、これも凜子さんのファッションレベルに合わせるためだ。着こなしにも年季が入っている。

凜子は午後に届けられた大きなカサブランカの花束をバカラの花瓶に生ける。  
それに合わせて白いラナンキュラスを家中に飾る。  
グラス類はすべてバカラでテーブルウエアはクリストフル。ウオールナットのダイニングテーブルに W・モリスのクロス。  
いい感じだ。

19時半にはすべての料理が、持ち込まれた食器に美しくセッティングされた。  
(食器やナフキンはロカンダ仕様)  
まるで料理カタログのイメージカットだ。

両腕にシャンパンやスイーツを抱えて、秋月は凜子の自宅前で時計とにらめっこ。  
19時29分30秒、40秒・・・・・・  
19時30分だ！ピンポン。秋月です。

扉が開くと  
「うわー！本物の秋くんだ。すごく久しぶり、どうぞ。」  
相変わらずセクシーなハスキーボイスだ。  
真っ白なトムフォードのブラウスに黒のスリムパンツ。  
肩までのウェーブヘアに、ポメラートのピアスはシトリントパーズだ。  
そして香りはウッディムスク。  
俺のフリッグがそこにいた。

「今日はイタリアンよ。」  
テーブルには一流を感じさせる料理が並ぶ。  
レストランではカメリエーレによってペースに合わせてサーブされるアラカルトが、

まるで pizzeria のように全メニューが集合だ。

「いいでしょ、この軽い感じが……味はサイコーよ。琥珀は鯛の切り身をペロっと完食。」

10年ぶりって感じがしない。すぐに打ち解けて昔のように会話している。

夢にまで見たフリッガとの再会……彼女の表情ひとつ一つから目が離せない。

「秋くん、なにぼーっとしてるの？話聞ってる？仕事で疲れてる？昔から口数が少なかったよね。」

「あまりにもうれしくて、言葉にならない。」

「そこはイケメン台詞ね。」

「そういえば、一昨日凜子さんを送ったときに、悔しいとか契約書とか言っていたので、何かお役に立てるかなと……。多分法律絡みと思って。差し支えなければ話してみて。」

シャンパンとワイン2本が空いたころ……

凜子は仔牛を美味しそうにほお張り、秋月は久しぶりの手長エビを堪能する。

この手長エビは南紀勝浦で獲れた極上ものだ。

「あたしは、氏名、性別、国籍すべて非公表のWEB作家なんだ。恋愛専門で気が付いたら読者がついて、アジア圏で人気になっていた。いまはソフトが翻訳してくれるので読みやすくやりやすい時代だよ。ここにきて新進作家が出版した本は売れないし、本屋は店じまい、出版社が倒産する時代。

覆面なら出版社との面倒な関係も避けられるし……。それでもどこから聞いたのか、出版社とゲームアプリの会社からオファーがあったんだ。それも無視していると恩人の紹介で仕方なく連絡を取るようになって。」

と話し始めた。

出版社からは書籍よりコミック（漫画化）に、それをベースにゲームを制作したいとのこと。

凜子は現代ものより大陸のファンタジー史劇を得意としていて、戦法が具体的で面白いことも人気の理由であった。まさにゲームとして成立するストーリーだ。

凜子の条件は、

作品が勝手に一人歩きしないために、必ず監修させてほしいこと

激しい性描写は禁止、候補漫画家の従来の作品をチェックする

ゲームに関してはキャラデザインと戦法をチェックさせてほしいこと

ストーリーから大きくはずれないこと

が絶対だった。

著作権譲渡契約書の項目に加筆された。

それから何も音沙汰がないまま、いきなりコミックが発刊し、タイトルも変更されていた。

大筋のストーリーは酷似していて、レディスコミック並みのセクシー描写で気分が悪くなるほどだ。絵のタッチも若年層向けでおよそ凜子の作品のイメージから離れていた。

当然、抗議する。

すると描写や作品の受け止め方や表現はそれぞれ異なるので、契約違反とは言い切れない。

加筆した部分は、どの部分を指摘しているのかが曖昧ですべてが契約違反とは言えない。

そのうちゲームが発売される。

作品のキャラクターとはかけ離れたボディラインくっきりのセクシーキャラで、史劇のヒロインとは思えない。

当然すべての制作過程において著者のチェックはされていない。

監修や原作者から凜子のペンネームを削除し、販売差し止めを要求するが、

「曖昧な指摘」を理由に名前の削除のみで販売されている。

顔出しはしたくないから、WEBメディアを選んだのに、先日出版社に出向いた結果がこれだったのだ。

日本の契約書に関するテンプレートそのものが曖昧な表現なのだ。

そこそこ金払ってあとは許容範囲内でいま風に売れる内容に変えればいい。

そんなこと作者には絶対に許されないことだが、出版社などの企業は強く、著者は作品を宣伝し発売してもらうのだからありがたく思え、という風潮がまかり通るのだ。

凜子の話を漏らすことなくメモをしながら聞き入る秋月。

日本ならではの悪習慣に呆れながら、損害賠償より販売差し止めとし、この案件を世間に知らしめることだ。

出版社や企業は痛手となる。

法律上は双方痛み分けだが強者はダメージが大きく、弱者である凜子は同情もあり、真の作品の評価がさらに上がるはずだ。

「凜子さん、俺に任せてください。損害賠償なんてつまらない。相手にその分のダメージを与えましょう。」

「お金なんていらない。ただではなく弁護士料分はもらってね。弱者を痛めつける企業や、名刺と肩書で威張りくさっている担当者をギャフンと言わせたい。」

マカロンとフルーツゼリー（銀座松屋限定の生レモンゼリー）を堪能した二人。

「やっぱりレモンよりグレープフルーツがいい。」

琥珀色のアマーロをブルゴーニュグラスに注ぐ。甘い香りが一層引き立つようだ。

「凜子さん、いい加減な日本式契約書はありますか？」

「曖昧失格のなら・・・」

「早速取り掛かります。曖昧というなら曖昧だからこそ攻める。会社と担当者を教えてください。こちらで調べます。」

「秋くん、リベンジよろしく。」

ソファで寝ていた仔猫が俺を見た。

「目の大きな子ですね。」

「瞳の色から琥珀って名前にした。出版社の帰りに北の丸公園で見つけたの。あまりにもいろいろあり過ぎたから幸運を招く琥珀かな。」

凜子さん、琥珀（アンバー）は想い人と結ばれるという意味があるんだ。

いままでも、いまも、これからも・・・。

「親父、著作権について強い弁護士は？」

「国内か？」

「世界的視野に立てる人がいい。」

「お前同様、国内外に強い国際弁護士がいる。映画や小説、テレビドラマと多岐にわたって活躍している。」

「どこにいるの？」

「うちの事務所の太谷弁護士だ。4か国語を話し、日米、台湾、香港やシンガポール、ヨーロッパでの仕事を経験したベテランだ。アスリートの海外移籍の仕事も多い。ジュニアアソシエイトとアシスタントを含む5名でチームを組んでいる。」

「実は凜子さんの案件なんだ。例のごとくいい加減な契約書で出版社とゲーム会社に追い込まれている。損害賠償より発売禁止に持っていきたい。調査会社を入れて周囲から固めて裁判するより世間から批判されるのが狙いだ。」

「彼女は家族同様、すぐに着手しよう。いい加減な契約書であれば崩すのは難しくない。担当者にも相当の打撃が与えられる。確実に解雇だな。」

さすが太谷弁護士は仕事が速い。勝つには情報力が8割と言っただけあって、

まず探偵事務所に、出版社の担当の周囲から聞き取りを依頼。

案の定、汚い手でヒット作品を生み出し、相当の恨みを買っているが会社では重宝されているのでやりたい放題。凜子の件もすれすれにくぐり抜け、契約書を突きつけ漫画家やゲームクリエイターを抱き込んでいた。彼の部下はそのやり方に閉口しながらも従わざる得なかったという。悪質な手口の証言は有り余るほど手に入った。

著作権譲渡契約書については、曖昧な点が多くグレーな個所がほとんど。これは出版社の法務部を攻めるつもりだ。それも双方痛み分けとする。

調査開始から1カ月で

悪質な契約でヒット作を生んだ出版社とゲーム会社を、同業者はもちろん、書評家やカリスマゲーマー、ライバル会社に告知してその手口をSNSで拡散。

被害にあったクリエイターの証言もあがって報道が過熱した。そして株価が一気に下がった。企業としては致命的だ。

予想通り、担当部署は解散、張本人はもちろん解雇、作品はコミックをはじめすべて差し止め、謝罪文の告知。

そして和解金500万円で終結した。

ついでに企業法務を担当する部署は弁護士が解雇された。

そして凜子の著作は話題を集め、閲覧数が右肩上がり。

外野が騒ぎ立て、そのうち著者の身元が割れそうに。  
彼女の希望もありひとまずWEBを閉鎖する。仕切り直しが賢明だ。

業界も変化の兆しが・・・。

2カ月後には

弁護士業界は強者、弱者でまかり通る日本の著作権譲渡契約を見直し、もっと気軽に相談できるようにフリーランスに門戸を開いた。

その間、秋月は凜子宅へ報告をかねて通った。  
お任せといっても経過が気になると思ったからだ。  
行くたびに夕飯を用意してくれたり、春花秋月で待ち合わせた。

初めて会ったときの熱量は20年経っても変わらない。  
いままでも、いまも、これからもあなたにしか心は動かない。  
好きで好きでたまらない。

懐深い彼の心遣いなのか、いつの間にかあの悔しくておぞましい事件を忘れてしまう。  
彼はわたしの気持ちを代弁し、リベンジしてくれた。理想の結果だ。  
もう日本の会社と契約はしない。どこも似たようなものだから。  
以前も数件海外からオファーがあったので、そちらに目を向けるつもりだ。  
もちろん契約については彼に一任する。

彼と会うごとに心が落ち着き、傷もふさがっていく。  
そしてカサブランカの香りで部屋が満たされる。  
彼のひざは琥珀のお気に入りだ。  
そうだ、お礼をしなくちゃね。なにがいいか・・・

マンションの中庭のテラスで凜子さんと休日のランチしよう。  
朝、近所のベーカリーでバケットとレバーペーストに豆乳ラテを買う。  
バケットナイフを持って凜子宅へ。

「暖かく天気もいいので中庭ランチのお誘いです。」  
「このバケットとレバペはわたし好み。」

凜子はゆったりとしたマックスマラーのセットアップ。全身白が美しい。  
秋月はBOSSのニットにブラックデニム。  
示し合わせたようなモノトーンコーデだ。

「凜子さん、明日デートしませんか？」

「いいよ。」

「10時にお迎えに上がります。遊園地に行きましょう。」

遊園地なんて何十年ぶりか……。何着ようかな。

今朝は明け方からクローゼットをごそごそ、洋服が幾重にも重なっている。

ふー、わかってはいたけど相当の衣装持ちだったんだ。まじで朝っぱらから疲れた。

バレンシアガのカジュアルラインでいくか。

オレンジのショートダウンに黒のカシミアニット、スリムラインのブラックデニム。エンジニアブーツとリュックはプラダで。

ジュエリーはヴァンクリ、アルハンブラのブラックオニキスで揃える。

これでよし。エレガントカジュアルの完成だ。

ドリンクは高山銘茶をポットに入れる。(凜子はペットボトルが苦手だ。)

9時59分、扉の前でロレックスのダイバーウォッチを睨む。58・59……

10時だ。ピンポン！

扉を開けると秋月だ。

ヒューゴボスで決まってる。

ブラックのダウンジャケット、真っ赤なカシミアのポロシャツにブラックデニムストレートライン。トッズのハイカットのスニーカーは白。ストールはエトロだ。

秋くんってこんなにおしゃれだっけ……。モデルさんみたい。

さすが凜子さん、以前からスタイリッシュでかっこいい。デートなんて夢みたいだ。

ずっと思い続けたからいまがある。

クルマはイケメンセレブお約束のメルセデスグレンデヴァーゲンの黒だ。

装飾のないシンプルな内装が凜子好み。細い都心の道には不向きだが……。

さて目的地は後樂園……。いまはドームシティか???

週初めの平日は空いていて、パーキングに難なく入庫。

もちろん乗り放題フリーパスチケットに平日割引。

水に浮かぶメリーゴーランドで癒され

バイキングで気持ちよく

ワンダードロップで絶叫！

進化系お化け屋敷に驚く

そして地上 80 メートルの大観覧車で絶景堪能  
全て 2 回こなして  
ソフトクリームにホットドック、ペプシコーラはお約束。  
そして最後にもう 1 回、バイキングとジェットコースターで乗り納めだ。

「凜子さん、昔から絶叫系や超速系が得意ですよ。何回もしつこく乗りまくる。」  
「そーよ。だって全身すっきりするでしょ。それに絶叫するとストレス解消になる。」

乗るたびに秋月は携帯カメラで凜子とのツーショットを撮りまくる。  
どんどん増える二人の熱いショットに熱量が上がる。  
姉弟でなく完全に恋人同士に見えるはず。  
「あのお兄さんお姉さんカップルかっこよすぎ。」  
「大人の恋人って絵になるよね、映画のワンシーンって感じ。」  
「え！撮影じゃないの？」  
食べ歩きしている女子高生からこんな会話が聞こえる。  
ふたりだけでデートするのは初めてだ。

「銀座行かない？バーニーズに行きたい。以前はいろいろお店もあったのに、いまは高級店過ぎて行きづらくて・・・どうにかバーニーズはね。」  
「はい。是非。」

大型車用パーキングに入れてバーニーズへ。  
ここは 1 階がメンズメインという珍しいリーシングだ。  
「いらっしゃいませ、凜子様。ご希望の品が入っています。」  
「本人を連れてきたので合わせてくれる？」  
白いブラウスを 5 枚ほど拵げる。  
素材やデザインが異なる。セレクトショップらしくエッジが効いているブランドが並ぶ。  
「バックにタックが入ってエアリー感があるデザインがいい。これはトムフォード？」  
「はい。上質なコットンに滑らかなレーヨンがはいっています。」  
「彼に合うサイズでこれとそれを 2 着お願いします。」  
「凜子様、少しデザインは異なりますが、レディースサイズもございます。いかがですか？」  
「欲しいかも。パールックはまずいかな。」  
「俺はうれしいです。」  
「そう？ではお揃いで。秋くん、このブラウスは曖昧な契約書のお礼よ。」

「夕食はいったん自宅に戻って出直そう。近所に行きたい店があるんだ。」

16 時にいったん帰宅、18 時に出発となった。

煙が凄いから覚悟してね・・・とのこと。何を食べさせるのか。18時にチャイムを鳴らす。

ふたりともインナーは変わらず、凜子はヨージヤマモトの MA-1 ジャケット。秋月はプラダのミリタリージャケット、二人ともブラックだ。

「さあ、行こう。御苑まで歩こうか。」

「はい。」

新宿御苑に近い鳥正と書かれた暖簾をくぐる。

「凜子さん、いらっしゃい。いつもの席でどうぞ。」

カウンターの奥に並んで座る。

「ホワイトのハイボールでね。あとは適当に出して。ここは皮とレバー、白ハツが絶品よ。」

レバーはたれで他はこだわりの塩味。計算されて焼き上がる数々の串は舌が唸る。

「最後に釜めしと鶏スープね。味噌カブおかわり。」

「近所にこんなに美味しい焼き鳥があるんですね。」

「この大将は一流割烹の花板だったのよ。素材も味も最高でしょ。」

「さすが食道楽の凜子さんだ。」

女将が秋月に声をかける。

「凜さんの新しい彼氏？」

「そうなたらいいなと思っています。」

新しいって最近別れた彼でもいたのかな。うーん気にしない。

「お腹いっぱいになったから散歩がてら新宿2丁目のBARに行こう。」

御苑から新宿2丁目はすぐだ。路地に入っていくとあちこちから声がかかる。

「凜ちゃん、うちに寄ってよ。」

「凜ちゃん久しぶり。隣の彼氏おいてってよ。」

などなど秋月にはちょっと刺激的だ。

凜子は構わずビルの地下に入っていく。「ラウンジ灯」の扉を開けた。

カウンター8席の店内は贅沢に広く、ガーシェインが流れている。

本当に帰国してよかった。

凜さんに出逢えたことは俺にとって最高の贈りものだ。

いままでも、いまも、そしてこれからも凜さんが想い人、俺の女神だ。

シングルモルトのボウモアをストレートで、チェイサーはコンガスが凜子スタイル。

俺はマッカランのロックをダブルで。

長崎時代の話で盛り上がるゆったりとした素晴らしい時間だ。

帰り歩きながら、ほろ酔い気分の凜子さんに思い切って聞いてみる。

「俺たち付き合ってる？」

「秋ちゃんとあたしが？どーかな。初デートだし。」

「是非よろしくお願いします。」

「了解。」

了解ってどう捉えればいいのかな・・・。

明日から上海に出張だ。

## 琥珀色の想い

琥珀、秋ちゃんは上海だって！なんか退屈だね。

お！電話だ。

「凜子？ご無沙汰だね。来月から本庁勤務。福岡から脱出できる。」

「駿さん？お久しぶり。福岡は美味しいものに溢れているし美人の宝庫なのに残念ね。栄転だから一応おめでとうと言っておく。電話番号替えたのによくわかったね。」

「まあそれなりに。実は明後日準備でそっちに向かうからご飯食べよ、連絡する。」

「検事からの連絡なんてあてにできないから一応覚えとく。」

長崎の頃からずっと恋人だった駿からだった。

相変わらずいい声してる。テレビ出演している女性弁護士との仲を騒がれ、福岡に転勤してから疎遠になった。相手の弁護士があまりにも挑発的で嫌気がさしたのもあるし、彼の言い訳も多忙を理由に不誠実だったこともあり、一気に熱が冷めたのだ。当然、未練も何もない。

あー秋くんから連絡ないかなあ・・・声が聞きたい。わたしたち付き合ってる？かな・・・。

2日ほど早めて帰国しよう。だいたいの予定は終わったし、あとは現地スタッフで十分だ。

さすがに凜子さんに1週間会えないのは不安だ。なんか嫌な予感がするんだな、離れていると。

中国には琥珀を販売する店が多く、銘品も多い。

凜子さんに琥珀のバングルを贈るため上海のスタッフに案内をお願いする。

「この琥珀のバングルはバルト海沿岸が産地でシーアンバーといわれます。色が美しく肌になじみやすいので身に付けるには最高です。サイズは？」

デートしたときに手首を握ったので測ってもらう。

「秋月先生、恋人に贈るんですか？このバングルは一級品です。喜びますよ。」

明日の帰国が待ち遠しい。

「凜子？春花秋月で19時にどう？」

「駿さん？いいよ、いまならフグかな、博多帰りだから牡蠣がいいか。」

「春花さんにお任せするよ。じゃあ連絡入れておく。」

秋くんも出張だし、駿さんは元カレで先輩だから食事くらいはいいか。

久しぶりに凜子の声を聞いた。

あまりにも忙しく、そして年上女性に翻弄され逃げ出すように福岡へ。

番号も変わり連絡が取れず音信不通・・・

帰京するにあたって思い切って蒼から連絡先を聞いた。

「凜子はフリー？」

「結婚はしていないな。相変わらず「花長」に一人で住んでるよ。未練ありか？」

「ああ、自分のなかでは終わっていないから・・・。」

オレンジのショートコートとトレードマークの白いブラウス、バックスキンの乗馬パンツにロングブーツ、グローブ、ストールはすべてエルメス。バングルにミニケリー。

霞が関の住人相手にはエルメスはコンサバでぴったりだね。

香りはもちろんエルメス、「ナイルの庭」で爽やかにきめる。

相手に合わせておしゃれするのは楽しいけれど、元カレってというのは気が進まないな。

ビジネス仕様のスーツから

裏地が美しいエトロのカシミアジャケットにパンツ、襟や袖の模様が艶やかなブラウスにペーズリーのカシミアストール。ほぼネイビーできめる。

香りはくだけた感じのアルマーニで。

麴町の住まいからタクシーで「春花秋月」へ。

幼馴染の蒼とは常に一緒に、弟の翔、妹の凜子はいつもくっついてきた。

やがて駿 18 歳、凜子 15 歳で付き合い始める。

子どもだと思っていた凜子に色香を感じた瞬間に、自分のものにしたくなったのだ。

遠距離恋愛も含め、やがては結婚するのかと思っていたが、俺の不甲斐なさからすれ違いが生じて別れた。割り切ることもないまま、想い続けて現在に至る。

今度こそ離さない・・・。

春花秋月の今夜のメインは、しゃも鍋。この時期はネギもキノコも美味しい。

♂は凜子流で中華麺だ。

そしてモエのピンクにバローロの赤、フラスカーティ白。

鍋はもちろん、しゃもの刺身や陶板焼きにもベストマッチ。

「相変わらず凜子のチョイスはソムリエ並みだな。」

「ワインセラーのある環境で育ったし、祖父の趣味でワイナリーもあるからね。」

「春花秋月は凜子の食堂だね。さすが至極の味を誇る。酒の種類も豊富だ。これからはお世話になるな。」

「住まいはどこ？」

「麴町に。職場にも近いし緑も多いから。凜子は花長だって。」

「春花さんの弟、秋くん覚えてる？」

「アメリカで活躍しているらしいと彼の親父さんに聞いた。仕事で会うからね。」

「帰国して花長の住人よ。すごくかっこよくなってきたよ。」

「え？帰国したの。」

「うん、先日著作権譲渡の件で助けてもらった。大人しい秋くんがキレキレのエリートに成長してた。」

「そのうち3人で食事しよう。」

「このあと灯に行こう。」

秋月が帰国・・・それも同じ法曹界とは。年下くんはまさか凜子に惚れてるのか・・・。

かなり久しぶりの凜子は、大人の色香が漂う女性になった。変わらずかつこいい。

しぐさや生き方に彼女らしいこだわりが感じられる。

いままでどんな恋愛をしてきたのかが気になる。

灯の扉分ける。

「凜ちゃん、日参ね。いらっしやい。あら今夜の連れもすごいイケメン。」

「蒼の友達。」

「今夜もってイケメンと来たの？」

「秋くんと来たよ。いつものね。彼はスコッチじゃないかな？」

「いや今晚はターキーで・・・。」

琥珀色のシングルモルトに黄金色のバーボン・・・

それぞれ近況報告だ・・・昔話はちょっと複雑。

「駿さんはこれからエリート検事まっしぐらね。」

「凜子は休業って？」

「しばらく、テキトーにしようかなと。」

「じゃあ、フリーなら時間があるときは付き合ってくれるか。」

「またそっちは激務が待っているから、無理でしょ。」

俺は今度こそ時間をかけてゆっくり関係修復するつもりだ。

羽田空港に23時着陸。タクシーで花長に帰る。

前方にタクシーのヘッドライト。背の高い男が抱えているのは凜子さん？

「運転手さん、ここで停めてください。」

向こうからこちらはわからない距離だ。前方のタクシーが動いてから降りる。

ほろ酔いの凜さんと相手の男はそのままエントランスに入った。

しばらく待っても男が部屋から出てくる様子がない。もしかして彼氏？

認証番号は誕生日。蒼が住んでた頃の間取りとほぼ変わらず・・・ただし、いまの方が断然おしゃれだ。

真っ赤なカッシーナのソファに凜子を座らせる。

デロンギのコーヒーマーカーの横にある密閉容器を開けると懐かしい香り。

凜子の好きなプレミアムショコラだ。

ペットボトルの水を注ぎコーヒーを淹れる。

数分後、落としたコーヒーをジノリのカップに・・・美味しい。

「美味しい、酔いも醒める。駿さん、今日のご馳走様ね。」

「これ飲んだら帰るよ。」

「そうして。恋人ではないからここまでね。」

30分程してエントランスにタクシーが到着、先程の男が乗り込み走り去った。

秋月はそのタクシーを見送った。

いったい誰なんだろう？

「凜子さん、週末は俺の家で夕食をいかがですか？」

「秋くん、料理できるの？」

「居酒屋風アラカルトでいいなら」

「もちろんよ。」

「では土曜日19時にお待ちしています。手ぶらで来てください。」

手ぶらなんて・・・さあてお土産は何にするかな。

秋ちゃんにはスペシャルなバーボンがいいか。

お酒専門誌の編集長に聞くのがいいな。

「凜ちゃん、どう調子は。先日の大手相手の著作権騒動はなぜか溜飲が下がったよ。」

「弁護士腕かな。そうそうプロに伺いたい！バーボン好きの男性に贈るとしたら銘柄は何がいい？」

「俺に聞くのは正解だね。断然ブランドンがオススメ。とろけるようなアンバー色にクリスタルの輝き、最高だよ。老舗クラモト氷業の球体スフィアとグラスが奏でる音は何にも代えがたい。それにボトルの美しさも絶対だな。ケンタッキーダービーの馬と騎手がキャップに象られている。」

「氷って注文できるの？」

「そこが老舗なんだな。球体のスフィアは表面積が最小で溶けにくいし、梱包が秀逸。最高の演出だよ。」

「うわーさすが業界のジョニデ！この極め細やかさ、女性だったらイチコロね。ありがとう。どこで手に入る？」

「ヒルズにある老舗の六本木銘酒なら間違いない。連絡入れておくよ。スフィアもある。凜ちゃん宅に配送してもらうように手配するよ。住所は荒木町でしょ。」

「明日着でよろしくお願いします。」

秋月は朝から超多忙だ。

凜子さんを招くとなればまずは仕込みだ。

食材は「春花秋月」頼みで、秋月の得意メニューの素材を板長に選んでもらう。

真鯛、マサバ、松茸が揃う。

本日のお品書き・・・達筆な春花に墨で書いてもらう。本格的だ。

◆対馬のしめ鯖

◆高野山のごま豆腐

◆薩摩地鶏のコンフィ

◆真鯛切り身の煮つけ

◆真鯛の潮汁

◆松茸ご飯

◆杏仁豆腐

料理の段取りがなかなか難しい。

鮮魚と鶏は板長に捌いてもらう。

ワインはイタリアのピエトラビアンカとコルテジァーラ（赤）

スペインのカヴァ（白）

フランスのピノブラン（白）

すべて和食にマッチするように冷やしておく。

さて、グラスはティファニーのロゴグラスシリーズにデカンタはリーデルとラリック。

食器はジノリのフィオーレヴェルディで。

断然箸派の凜子さんに輪島塗の長尺箸を用意する。

仕込みを終えたら家中大掃除。

午前中に届けられた黄色いバラとオンシジウムは、それぞれリーデルの花瓶に生ける。

香りはJO Maloneで。

そして上海からの琥珀のバングルはブラック&ゴールドのギフトボックスに・・・。

好きな女性を自宅に招くなんて初のことだし、手料理でもてなすことなんてもちろん皆無。

欧米時代に仲間を大勢招いて料理を振舞うことはあったが・・・今日は格別に緊張する。

「うわーすごい！まるで割烹ね。秋くんってパーフェクトなんだね。」

ダイニングテーブルに並べられた料理に凜子は驚く。

食器、盛り付け、セッティングと最高のビジュアルディナーがそこにある。

「凜子さんのためにMAX頑張りました。」

「これ、どうぞ。ちゃんとその道のプロ推奨だからいいと思う。」

凜子はジョニデ編集長が手配してくれたバーボンと特別な氷を手渡す。

「すごい、球体の氷まで！！！」

「このティファニーシリーズ、気になっていたんだ。それにフィオーレも。秋くんと趣味が合う。」

当然、憧れの凜子さんの好きなモノやコトは俺のすべてだから。

味だって凜子さん好みで板長直伝の薄味だ。

「わたしは料理男子が恋人の絶対条件。秋くんの彼女候補にして。」

彼女候補じゃなくて凜子さんは俺のすべてだから。

「凜子さん、上海からの贈りものを受け取ってください。」

BOXを開くと黄金に輝くバングルが……。

「琥珀の瞳の色だ……これが琥珀、アンバーだね。」

腕に思いきり通す。輝き美しい琥珀のバングルだ。

「バルト海沿岸のシーアンバーといわれる種類で、肌になじみやすく希少らしい。」

「ありがとう。これは見たこともない美しさ……。」

球体の氷に輝くバーボンのようだ。

秋くん、どの料理も最高に美味しい……

「この杏仁、滑らかで最高……うちの味に似てる。」

「レシピとコツを翔さんに聞きました。凜子さんの大好物だから。」

「秋くんって何でも知っているね。」

「凜子さんのことなら……」

「秋くんがいない間、寂しかったよ。」

「うれしい。」

秋月は豆を挽く。チョコレートの香り……

わたしの好きなプレミアムショコラをフレンチプレスで淹れる。

至極の香りだ。

「これって凜子さん好みでしょ。」

しっかりオイルまで抽出された薫り高いコーヒーにジノリの白が美しい。

秋月は凜子の前にひざまずき、手を握り見つめる。

「凜子さんは初めて会ったときから俺のフリックガなんだ。そう、永遠に輝く女神。凜子さんと並べる男になるために必死にもがいてきた。これから凜子さんをずっと守るって誓う。

どうか俺の恋人になってください。」

なんと真面目な告白……ビンテージなセリフだ。

秋月の顔が赤らむ。

激しい恋より穏やかな恋がいい。

燃え尽きた後はゆっくりじっくり温めてくれる…そんな愛がいい。

凜子は秋月の両頬を包み込むように、顔を近づける。

「うん、わたしを大切に守ってくれるなら。」

そして秋月にそっとキスをした。

秋月は痺れるような快感に襲われる。

凜子の腕を引き寄せ唇を重ねる。

甘い香りが鼻腔を抜ける。まるで夢のようだ。

思いきり抱き寄せ、深く激しいキス・・・一気に熱量が上がる。

凜子は秋月を情熱的に受けとめてくれる。

## 願いが叶う幸せ

「春花さん、今日のランチは何？」

「凜ちゃんの好きなギンダラの西京漬けに、キノコご飯かな。」

凜子は春花秋月でランチ。週2回は必ずここで和食だ。

「秋くんと付き合っているんだ、最近。」

「何十年越しの恋が実ったんだ、秋月……。凜ちゃんは彼の女神よ。暗唱コードやバイクの名前すべてが愛の女神<フリガ>で、暗証番号やクルマのナンバーは凜ちゃんの誕生日。ほんとわかりやすいのよ。初恋だからね。」

「そうなの？気づかなかったなあ。」

「駿君と付き合ってたし……。彼に負けたくなくて弁護士としてがんばれたのかも。」

「いまとなっては比べるべくもないけどね。秋くんといるとすごく心が落ち着くし癒される。燃え上がるような恋に憧れたけど、いまは包み込むような温かい愛がいい。」

「秋月はまさに幸せの絶頂期、願いが叶う幸せに浸っているね。」

凜子と秋月は隣同士、仕事が入らない限り夕食は毎日一緒だ。

まだ一緒に朝は迎えていないが……

オールラウンダーの秋月は毎日超多忙の売れっ子弁護士だ。

容姿端麗なこともあり取材やメディア露出が多くファンクラブまであるとか。

凜子のために著作権や著作権など権利関係の仕事を引き受けることが多い。

まさに最強のパートナーだ。

凜子は戦国時代の知識や絶妙といわれる戦法を活かして、ファンタジー史劇の執筆に精力的だ。

台湾からドラマ化のオファーがある。

いまは商業的ではなく書きたいものを綴っている感じ……。ちょっとしたリハビリだ。

週に1回、近所のイタリアンとフレンチレストランで開催される料理教室に通い始めた。

10名程の生徒はフリーランスや大使館関係者なので会話も弾む。シェフも生徒ももちろん多国籍でボーダレスだ。

そして習ったレシピを秋月のために作る。料理に詳しい凜子が作れるとなれば最強だ。

本日のメインディッシュはミラノ風カツレツにスプリ。

とろけるチーズの量が難しいし、牛肉をたたくコツがなかなか……。

タルタルソースにもチャレンジだ。

食器は最近開店した作家モノを扱うセレクトショップにはまっている。

今日は藍と白のコントラストが美しい波佐見焼を揃えた。  
ワインはNAPAだ。そしてグラスは白磁が美しい有田焼で。

本日の生け花は真っ白いリンドウで。

秋月はさっさと仕事を終えてデザートを受け取りに向かう。  
デザートはエルメのフルーツタルト。表面のビジュアルが絵画のように美しい。  
クリスマスケーキはここがいいかな・・・

着替えて自室を出るときに、ここ毎回持っていく小さな箱をポケットに入れる。  
何度も渡すタイミングがつかめず不発に終わっている・・・  
長崎にある凜子御用達の宝飾店に依頼したジュエリーだ。  
蒼の病院、翔の観光業とホテル、レストランの仕事に合わせて訪れたのだ。  
凜子を知り尽くしているオーナーのアドバイスでオーダーする。

「海外の宝飾ブランドは普段使いによくされていますので、スペシャルな贈り物となるとやはり唯一無二であるオーダーがおすすめです。」

「彼女の感性に合うって何がいいのかな。」

「失礼ですが、凜子様の恋人ですか？」

「まあ・・・」

「プロポーズであれば、ダイヤモンドですね。」

「ありきたりではありませんか？」

「デザインで個性を出します。プリンセスカットはいかがですか？その名の通り婚約指輪には最適です。」

「小粒ではらしくないし、大粒過ぎずいつもしてもらえる大きさが理想です。」

「イエローダイヤは？凜子様は琥珀やゴールドが似合います。」

「凜子さんはハイセンスだからお任せします。」

「いいルース（裸石）が入れば揃いのピアスもいいですね。」

「サイズがわからない。」

「凜子様の指10本すべて把握しておりますのでご心配なく。」

「来月またこちらに来るのでその時でいいですか？」

「ご連絡いたします。イエローダイヤは<永遠の愛>といういわれがあります。」

「翔さん、凜子さんにプロポーズします。指輪も用意します。」

「付き合っているなら相思相愛。秋月は初志貫徹だね。駿さんが霞が関に栄転、蒼に凜子の近況を聞いてたよ。会った？」

「いえ、知らなかった。」

「まあ、凜子にとっては忘却の彼方だからわざわざ話すこともないんじゃないかな。」

そして1カ月後、濃い陽光のような黄金色でプリンセスカットが眩しい大粒のリングとピアスが手に入った。

まさに凜子にピッタリなダイヤだ。

凜子と食事をするたびにタイミングが合わずまだ手元にある。

過度な演出やベタなムードは逆効果、ナチュラルに重すぎずと翔からアドバイスされた。

どうしたらいいかまるでわからない。凜子さんに回りくどさは必要ない、ストレートに思っているが……。

自宅の食事プロポーズはカジュアル過ぎる気もする。

もっと俺らしく綿密に計画を立てるべきだ。

凜子さんとの食事は最高に楽しい。

「今日のカツレツはスペシャルに美味しかった。シェフの指導がいいのか、凜子さんの素質なのかどちらにしてもうれしいことです。」

「秋くんを喜ばせたくて習っているんだよ。わたしって意外に尽くすタイプみたい。自宅で仕事しているし、主婦に向いているかもね。」

「働く凜子さんは素敵です。そして料理をする凜子さんは本当に可愛い。」

「秋くん、ゲームできる？今度の小説はゲームの世界に入り込むという設定でいこうかと、任天堂スイッチを秋くん用と2機買ってきたからやろう。」

「はっきり言ってかなり上級ですよ、俺は。」

週末ということもあり、明け方までゲームに没頭し、ワインの空瓶が並んだ。

当然、ダイヤはお持ちかえりということになる。あーまたもや不発。

先は長そうだ。

## ジェラシーは最高の愛情表現

凜子の住まいのエントランスには大きなクリスマスツリーが立ち上がる。

天然のもみの木に今年はゴールドとシルバーを基調とした装飾に、数えきれないほどの電球が散りばめられる。そしてたくさんのポインセチアが並び、クリスマス一色になる。

「凜子、ちょっとしたパーティがあるから同伴して欲しい。」

「駿さん？いきなりどうしたの？どんなパーティなの？ドレスコードがあるのは面倒くさいからいやだ。」

「クリスマスカラーを身に付けるってことかな。アクセサリやバッグ、靴やグローブとか小物で十分だよ。男性はチーフやネクタイ、マフラーが赤や緑というのが定番。女性はネイルやヘアアクセサリ、ルージュが多いらしい。

主催は法曹界関係で場所はニューオータニだ。食事とお酒は人気シェフやバーテンダーのライブで和洋折衷豪華版。それだけでも十分価値はある。戻ったばかりで同伴者がいないんだ、助けて欲しい。」

「ちゃんと探した？エリート駿さんの誘いならみんな行くでしょ。」

「いきなり頼みづらいし、借りは作りたくない。」

「わかった。詳細はメールください。」

「当日は迎えに行くから。」

法曹界主催って秋くんは関係ないのかな。

「秋月さん、パーティには出席しますか？まあ法曹界のお見合いパーティといわれてますけど。秋月さんの出席を懇願する人が多くて。そうそう官僚界ナンバー1の駿様に対抗できる弁護士会のスター秋月さんは注目です。」

「興味ないなあ。」

「噂によると駿様は女性同伴とか・・・いま調査中です。」

クリスマスカラーかあ・・・

凜子は母の還暦祝いに贈ったコムデギャルソンの真っ赤なパンツスーツを引っ張り出した。

一度着たら二度は着られないからと母からのおさがりだ。

ヒールとインナーはゴールドかな。さすがに緑はないなあ・・・

ネイルとルージュを真っ赤にすればそれなりかな。

今日はデミグラスソースで煮込んだハンバーグ。ステーキ用の牛肉を細かく刻んで（肉屋さんにお問い合わせ）凜子特製、キャベツを細かく切って混ぜる。キャベツの甘みと食感が絶品だ。

料理教室で学んだ成果だ。

付け合わせはカリフラワー、ニンジン、ポテトを茹でてお手製のフレンチドレッシングであえる。

スープは冷蔵庫の野菜を細かく刻んで、ベーコンで塩味をだしたポトフもどき。

甘みと軽さが爽やかな発砲赤ワインのランブルスコ。  
ここまででどっと疲れた……。それでも新婚みたいで楽しい。

「凜子さん、ただいま」  
凜子の家であっても秋月は毎回「ただいま」だ。  
そしてキッチンに立つ凜子を後ろから抱きしめる。  
恋愛っていいな……

「そうそう、オータニで法曹界のパーティがあるから先輩に同伴を頼まれたの。秋くん知ってた？」  
「凜子さん行くの？」  
「うん。」  
「先輩って？」  
「駿さん。」  
「栄転の話は聞いていたけど、もう会ったんだ。」  
「うん。こっちに来てすぐかな。春花秋月で食事したっけ。」  
「恋人は俺なのに同伴ってルール違反な気がする。」  
「約束しちゃったもん。怒ってるの？」  
「嫌だな。」  
「それってもしかしてジェラシー？」  
「うん、ジェラシー。」  
「もうだいぶ前に別れたし、いまは友達で恋愛感情なんてまるでなし。秋くんがいるしね。」  
いくらごねても凜子さんが約束を反故にすることはないだろうな。  
駿さんか……。気になる、すごく。まだ指輪も渡せていないのに……。

真っ赤なパンツスーツを颯爽と着こなした凜子は、ヴァレンティノのスーツに真っ赤なブラウスで決めた駿と会場に入る。

駿は注目の的だ。もちろん凜子が見劣りすることはない。  
エリート検事の駿はあっという間に法曹界の女性に囲まれて、凜子は駿から離される。  
相変わらずのモテっぷりだ。ヤキモチでも焼かせたいのかな。  
バイキングは種類豊富でライブクック、本格的なメニューが楽しめる。  
さてそろそろお腹も満たされたし、女性に囲まれる駿を置いて会場を後にした。

ロビーに長身の秋月がひときわ目立っている。  
凜子は秋月に向かって走り出した。そして秋月に思いきり抱きついた。  
「秋くん、なんでここに？もしかしてパーティに？」  
「恋人を迎えに来ました。」  
「うれしい、すごく会いたくなったら秋くんがいた。」  
秋月は真っ赤なスーツを着た凜子を思いきり抱き締めた。周囲はまるで時間が留まったように二人に注目。ち

よつとしたドラマのワンシーンだ。

「さあ、凜子さん帰りましょう。」

「うん。」

「このスーツ似合っている？着替えてくるね。」

「とても素敵ですよ。」

「じゃあ、あとでね。」

凜子の部屋の扉が閉まりかけたとき、秋月は手をかける。そして室内へ。

凜子の腕を引き思いきり抱き締め頬に触れる。

「秋くん、震えてる。」

「すごく緊張している。」

凜子は目いっぱい背伸びをして秋月にキスをする。

凜子の甘い香りが秋月を刺激する。

「このまま止まらなくなりそうだ。」

凜子は秋月の瞳を捉え

「もっと早く言いたかった。秋くん、好きでたまらない。あなたとずっと一緒にいたい。

ねえ聞いている？」

秋月は見上げた凜子の唇を奪う。激しくそして甘く……。

凜子を抱き上げ寝室へ向かった。

目を覚ますと凜子が秋月の胸に顔を寄せて眠る姿が……

秋月は思いきり抱き締める。

脳裏に甘い時間が廻り熱量が上がる。

凜子の耳元で囁く。

「凜子さん、俺のこと愛してる？」

凜子と背中合わせで琥珀が眠っている。

「うーん、秋くんとずっと一緒にいたい……。抱きしめて」

「もう少し凜子さんを感じていたい……。」

秋月は凜子に自分を重ね、懐に包み込む。

凜子の唇から漏れる甘い囁きに胸の鼓動が速くなる。

夜明けまでたっぷり愛し合う時間がある。

「秋月さん、もしかして恋人います？」

「いきなりなに？」

「SNSに女性とハグしている写真がアップされています。」

アシスタントが携帯画面を見せる。  
真っ赤なスーツの凜子さんを抱きしめる秋月がいる。  
いまは何でも撮影し、勝手にアップする。肖像権侵害だ。  
「恋人だから問題ないでしょ。」  
「うわー法曹界の貴公子に恋人出現か…ショック！」

凜子と秋月か・・・駿は画面に釘付けだ。  
憎らしいほど決まっている。  
ふたりは恋人同士か・・・。

秋月は仕事から帰ってからほぼ凜子の家で過ごし、朝、自宅へ戻り着替えて出勤する、  
プチ同棲生活だ。

広島のカライアントから殻付き牡蠣がたくさん送られてきた。  
海外企業の吸収合併から老舗を守り抜いたお礼だ。難しい案件だが、秋月はアメリカの経験から非道な吸収合併を阻止するだけの十分な手腕がある。  
この件は日本を代表する老舗だけにニュースでも取り上げられ、対黒船勝利は大きな話題となった。  
それからさらに依頼が増えたことは言うまでもない。

殻付き牡蠣は花長の板場で下処理をお願いする。  
長ネギや白菜、ブロッコリー、キノコ類など使用する素材は花長に仕入れてもらう。  
やはり料亭の素材は一流揃いだ。  
今晚はサプライズ牡蠣のフルコースに決めた。  
午後半休を取り、凜子に内緒で準備する。

板長と相談をしたサプライズメニューは  
生牡蠣  
牡蠣のアヒージョ  
牡蠣フライ  
白湯の牡蠣鍋  
あっさりした牡蠣ときくらげの炊き込み飯  
そしてだいぶ作り慣れた翠月楼流杏仁豆腐だ。

殻付き牡蠣と共に、広島の名酒「雨後の月」も手に入った。  
球体の氷スフィアも届く。

そしてメインはなんとといっても機会がなく苦戦していたプロポーズだ。  
もうこれ以上は待てない。

花が届く。白い八重咲のトルコ桔梗だ。  
それとサプライズの白いカサブランカを花束に。

何も知らない凜子は上京している翔の虎ノ門オフィスへ。

「凜子、そろそろ本格的に仕事しないか。」

「一応執筆はしているよ。」

「翠月楼はソウルに進出する予定だ。」

「家業となればいくらかでも手伝うよ。」

「その時は頼む。今日は買い物に付き合っ欲しい。」

「女性に？」

「母さんの誕生日だ。」

「ママにはブレスレットなんかいいんじゃない？他はたくさん持っているでしょ。銀座に行こう。」

あ！メールだ。

「凜子さんは何時に戻りますか？秋」

「18時頃には。夕食は一緒に食べよう。凜」

「では19時に俺の部屋で。」

「誰から？」

「秋くん。翔は夜会食だから秋くんと食べる。付き合っているんだ。」

「秋月と凜子が？？？駿は一步遅かったな。」

「いまは幸せだよ。お土産は何がいいかな。」

## 生涯かけて愛すること

19時に秋月の部屋へ。左手にはブルーのギフトボックスが・・・。  
母親のプレゼントを買いに翔とティファニーへ。  
そこで秋月に洗練されたデザインのボールペンをゲット！  
ティファニーブルーのボックスに魅かれるんだなあ。

「牡蠣のフルコース料理をすべてテーブルに並べました。鍋は最後です。」  
「うわー、すごい！料亭だね。」  
あらゆる牡蠣がマイセンブルーオニオンシリーズに盛り付けられている。  
スタンダードな絵付けながら牡蠣と相性がいい。さすがのセンスだ。  
「雨後の月」はシャンパングラスに注がれ琥珀色に輝く。  
「アヒージョと日本酒ってすごくマッチする。この牡蠣はお取り寄せ？」  
「ちょっと世間を騒がせた黒船襲来の件で、広島のお店から御礼にといただきましたので、凜子さんと堪能しようかとおもって。たしか牡蠣は好物だと記憶しています。」  
凜子は本当に美味しそうに食べる。その姿を見るだけで幸せになる。

生牡蠣の冷たくツルつとした喉越し  
オリーブオイルとガーリックで力強い味のアヒージョ  
サクツとした衣からトロリと牡蠣の風味がこぼれる  
潮の香を残したスープに牡蠣の弾力ある食感がたまらない牡蠣鍋  
牡蠣の食感ってなんだか艶っぽくて色っぽいかも・・・

「秋くんはプレゼント。翔とティファニーに行ったのでゲットしました。」  
ギフトボックスを開けると美しいティファニーブルーのボールペンが。  
「秋くんはスーツも決まっているから、胸ポケットに差すボールペンもカッコよくないとね。いいでしょ。落とさないでね。」  
「うれしいです。凜子さんからの贈りものは最高に素敵です。」

「白湯スープの牡蠣鍋ってあっさりしていて牡蠣の旨味を存分に味わえるね。」  
「板長直伝です。デザートはいつもの杏仁です。」

食事を終えて、香り高いフレンチローストでめる。

ソファに座る凜子の前に秋月が跪く。  
凜子は思わず立ち上がる。  
秋月は凜子を見つめながら、ギフトボックスを開ける。

金色に輝くダイヤのリングだ。

「凜子さん、20年間、一途に人を愛することがこんなに幸せだと知りました。これからも生涯かけて凜子さんだけを愛することを誓います。結婚してください。」

「20年間も？ありがとう。うれしくて・・・これからもずっと一緒だね。」

凜子の指にプリンセスカットのイエローダイヤがはめられた。

ぴったりのサイズだ。

そしてカサブランカの花束を抱えて思いぎり香りを吸い込んだ

秋月は思いぎり凜子を抱きしめた。こんなに幸せなことってない。

「秋くん、プロポーズにキスはお約束よ。」

秋月は凜子の顔を引き寄せて唇を重ねる。凜子の甘いムスクの香りが鼻腔を通り抜ける。

このままひとつになりたい・・・

秋月は凜子を抱き上げ、寝室へ向かった。

20年分の想いが一気に溢れ出たのか、凜子から離れられない。

凜子の隅々まで知り尽くしたいと願うが、そこに辿り着く前に凜子に溺れてしまう。

こうして凜子を抱ける自分が信じられないほど幸せだ。

「これは同じ石から作ったピアスです。」

「素敵。リングとお揃いね。」

「実は凜子さん御用達の宝飾店でオーダーしました。」

「支配人なら完璧。正しい選択ね。翔かな。」

「はい。確実なアドバイスをいただきました。」

耳たぶいっぱいイエローダイヤが輝いている。

まさかあたしが結婚するとは思わなかったな。それも旧知の秋月と。

愛されるって暖かくて包み込まれるよう・・・。こんなにも素敵なことなのね。

相変わらず売れっ子で超多忙な秋月。

翠月楼の飲茶店オープンに向けてソウルと日本を行き来する凜子。

大人の恋愛は互いの都合を優先しながら寄り添っていくものだ。

そして年月もゆっくりと過ぎて行く。

「翔、秋月と結婚するつもり。プロポーズを受け入れた。」

「秋月かあ。凜子一筋、積年の想いが実ったわけだ。」

「20年とか言ってた。すごいよね。秋くんはいま超売れっ子だから落ち着いてからもろもろ考える。別にこの歳で結婚式はしたくないしね。住まいもそのままでもいいし、相互の親に報告するくらいかな。」

しばらくして、結納を兼ねた凜子と秋月のファミリーの顔合わせが花長であった。

祖父の時代から縁があることもあって、結婚の話はスムーズに進み結納も滞りなく行われた。結婚式は秋月の

仕事の調整が難しく改めて相談することになる。

## 最高に幸せなこと

ソウルから帰宅。風邪なのかだるく気分が悪い。それに貧血気味なのかフラフラだ。

「秋くん、先に休みます。風邪気味のようなのでまた明日ね。」

「薬を買って帰宅します。」

寝込んで2日目。熱は下がったが、だるさが抜けず吐き気がおさまらない。

女子医大病院近くにある蒼の後輩のクリニックへ向かう。タクシーで5分だ。

事前に連絡してあるので待たずに診察。

「蒼先輩は相変わらず独身貴族かしら？今日はどうしたの？」

「うん。風邪かなあ。熱は下がったけどだるくて。ソウルから戻ったばかりだし。」

「疲れかなあ。検査するね。」

「血液検査と尿検査をして結果が出たら呼びます。待合室にいてください。」

15分程で呼ばれ、診察室へ。

「凜ちゃん、風邪ではなく妊娠初期よ。おめでとうございます。」

「ほんと！！もう30代後半だけど大丈夫かなあ。」

「きちんと管理すればまだまだ大丈夫よ。」

「うれしい！プロポーズされたばかりだから。」

「至急、蒼先輩に相談すること。」

秋くん、喜ぶかな。事務所にいるかな。

おめでとう診断で吐き気もだるさも吹っ飛んだ。

「秋くん、夕飯は外で食べよう。18時に事務所へ迎えに行くね。」

「風邪は大丈夫？吐き気は？食べられるの？」

「うん。到着したら電話するね。」

妊娠がわかったせいか、無性にステーキが食べなくなった。

久しぶりに「うかい亭」のステーキが食べたい。銀座だな。

18時少し前にタクシーで事務所前に付ける。秋月を見かけた凜子が声をかけるとタクシーに乗り込んで銀座並木通りへ。

鉄板焼きコースをオーダーする。

「凜子さん、ワインはどうしますか？」

「結婚も決まったし奮発してオーパスワンは？」

「グッドチョイスです。」

上質な素材だからこそ料理人の腕が試される。

オーパスワンの鼻腔を抜けるような香りと甘美な喉越しに酔いしれながら、最高級の肉を堪能する。

「鉄板焼きって香りや音、美味さ、そして料理人の手さばきと感性を刺激するよね。」

「凜子さんらしい表現ですね。」

「オーパスワンでお祝いしたかったんだ。結婚が決まったこともそうだけど、実は今日妊娠初期と診断されたから。」

「え????なんて?」

「だから秋くんとわたしの赤ちゃんができたの。」

「……………。こんなうれしいことってあるんだ。夢みたい。早速報せないと。」

「今日は二人でお祝いして明日報せようね。」

秋月は天にも昇るような気持ちだった。20年間思い続けた凜子さんと恋人になって、結婚も決まった最高の幸せがさらに妊娠なんて凄すぎて怖いくらいだ。

「みんな祝福してくれるね。」

「今日はここで帰りましょう。無理させられませんよ、もう一つの命を授かったんだから。」

まだ宵の口の銀座からタクシーで四谷に帰宅する。

交差点手前で急ブレーキ、車体が回転した。

「タイヤが転がってきます。うわー避け切れない。」

車体が浮かび上がった。

ガラスが砕け散る音。

秋月が凜子に覆いかぶさる。

温かく血生臭い…………。

凜子の意識が消えていく。

救急車では隊員が馬乗りで凜子の心臓マッサージ。

ストレッチャーで救急に運ばれた。

「意識混濁、脈が弱い。頭部裂傷。すぐに検査して!」

凜子は昏睡状態でICUへ。

目が覚めたときは7日が経過していた。

頭部のケガが原因か、事故の記憶が曖昧で、検査の結果「解離性記憶喪失」と診断された。

「無理に記憶を戻す必要はない。まだ現実を受け止めるのは不可能だ。」

「まずはケガの治療が先、それからゆっくり考えよう。実家で療養するのがいい。」

秋月は凜子をかばったまま心肺停止、ほぼ即死だった。

この事実は何があっても秘匿。記憶が曖昧な凜子に秋月の死を報せることはない。

## 忘れたい記憶の扉を閉じる

なぜかここ数年記憶が曖昧だ。

この子は琥珀というらしいがいつからわたしの同居人なのか。

療養のためすぐに長崎の実家に琥珀とともに帰る。

衝突事故に巻き込まれて頭にけがをしたことで記憶の一部が消滅しているとか・・・

現状生活に支障はないが、心配する家族の言う通り実家に帰ることにした。

必要なものをまとめて、あとは業者に一任する。

左指には大きなイエローダイヤ。珍しいプリンセスカットだ。

そして耳たぶにもイエローダイヤのピアスが光っている。

割れた琥珀のバングルの欠片を翔がキーホルダーにリデザインしてくれた。

「こんなに素敵なジュエリーは誰がプレゼントしてくれたの？」

「残念ながら俺だよ。凛子はゴールド系が似合うだろ。」

「あたしの好みを知るは兄の翔なりってことだね。」

「さて、クルマが来たから出発しよう。」

自室の扉を出る。

左側の扉から誰かが出てくる予感がする・・・既視感ってやつかな。

「あの部屋は誰が住んでいるの？」

「うん、ずっと空き部屋らしいよ。さあ、飛行機の時間があるから行くぞ。」

## 読者が選ぶ、推しフレーズ

読者お気に入りのボーダレスなロマンティックシーンをセレクトしました。

---

「今日はイタリアンよ。」

テーブルには一流を感じさせる料理が並ぶ。

レストランではカメリエーレによってペースに合わせサーブされるアラカルトが、まるで pizzeria のように全メニューが集合だ。

初めて会ったときの熱量は 20 年経っても変わらない。

いままでも、いまも、これからもあなたにしか心は動かない。

好きで好きでたまらない。

本当に帰国してよかった。

凜子さんに出会えたことは俺にとって最高の贈りものだ。

いままでも、いまも、そしてこれからも凜子さんが想い人、俺の女神だ。

オレンジのショートコートとトレードマークの白いブラウス、ボックスキンの乗馬パンツにロングブーツ、グローブ、ストールはすべてエルメス。バングルにミニケリー。

霞が関の住人相手にはエルメスはコンサバでぴったりだね。

香りはもちろんエルメス、「ナイルの庭」で爽やかにきめる。

俺に聞くのは正解だね。断然ブランドンがお薦め。とろけるようなアンバー色にクリスタルの輝き、最高だよ。

老舗クラモト氷業の球体スフィアとグラスが奏でる音は何にも代えがたい。それにボトルの美しさも絶対だな。

ケンタッキーダービーの馬と騎手がキャップに象られている。

目を覚ますと凜子が秋月の胸に顔を寄せて眠る姿が・・・

秋月は思いきり抱き締める。

脳裏に甘い時間が廻り熱量が上がる。

凜子の耳元で囁く。

「凜子さん、俺のこと愛してる？」

板長と相談をしたサプライズメニューは

生牡蠣

牡蠣のアヒージョ

牡蠣フライ

白湯の牡蠣鍋

あっさりした牡蠣ときくらげの炊き込み飯

そしてだいぶ作り慣れた翠月楼流杏仁豆腐だ。

殻付き牡蠣と共に、広島銘酒「雨後の月」も手に入った。

球体の氷スフィアも届く。

そしてメインはなんといっても機会がなく苦戦していたプロポーズだ。

もうこれ以上は待てない。

20年分の想いが一気に溢れ出たのか、凜子から離れられない。

凜子の隅々まで知り尽くしたいと願うが、そこに辿り着く前に凜子に溺れてしまう。

こうして凜子を抱ける自分が信じられないほど幸せだ。